査問

川上徹

ちくま文庫

ちくま文庫

査問

二〇〇一年七月一〇日　第一刷発行

著　者　川上徹（かわかみ・とおる）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　明和印刷株式会社
製本所　株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三
© TORU KAWAKAMI 2001　Printed in Japan
ISBN4-480-03656-3 C0131

ちくま文庫

査問

川上 徹

筑摩書房

目次

まえがき　7
第一章●査問の風景　12
第二章●査問する側される側　85
第三章●釈放後の風景　132
第四章●離脱の風景　184
第五章●昨日の世界　237
あとがき　272
文庫版あとがき　275
解説――加藤哲郎　279

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

查

問

まえがき

査問とは「しらべて問いただすこと」（「広辞苑」）である。

査定、査察、捜査、「査」を含むいずれのことばも「する側」はともかく「される側」にとっては、あまり心地よい響きをもたない。とりわけ本書のタイトルとなっている「査問」は、一般社会ではほとんど馴染みがないだけあって、イメージすることは困難であろう。分からないということは、聞く人の想像力をかき立てるものであり、不気味な感じをもつ人も多いだろう。読みようによっては、本書は、ミステリーを解くときのような興味の対象になるかもしれない。

世間はともかく、このことばは日本共産党の内部においては、独特の意味合いをもったものとして生きている。いわば党内用語と言えるだろう。党員ならば、それがどんな事態を指すかは知らなくとも、一度ぐらいはこのことばを耳にしたことはあるはずだ。もっとも、このことばは規約上の正式なものではなく、その意味で俗語または通称である。

党規約第六一条は、党員でありながら党をあざむきこれを破壊しようとして規律に違反した者が出てきた場合に、組織を守るために、党はその者を「処分」することができると定めている。そして同条第二項は「規律違反について調査審議中のものは……党員の権利を必要な範囲で制限することができる」とする。査問とは、この「調査審議」のことであるとされている。正式に「査問」の意味内容を説明するのは、この四文字だけである。

政党に限らず企業にせよ任意団体にせよ宗教団体にせよ、社会的に存在するあらゆる組織は自らの組織の維持をはかり発展させるために、規約のような成文の存否にかかわらず、内部に破壊者が発生した場合の措置を定めているのが普通である。共産党だけが特別の規約をもっているわけではない。懲戒解雇や減給処分や除名や資格停止や追放といったように。そして、誤った処分によって組織自体の活力が失われないように、慎重な手続き規定があるのも普通である。共産党でいう調査審議、つまり査問もそうした手続きの一種であるとされているのである。だが、ことばだけでは実態は分からない。

本書は主に、私が直接体験し見聞した、ある大規模な査問事件とその後の経緯を記録したものである。事件は、今からほぼ二五年前、一九七二年に起こった。その事件は、党内では新日和見主義事件と呼ばれた（以下、たんに「事件」と記された場合は新日和見主義事件のことを指す）。つまり「新日和見主義」と名付けられた「一派」に対する査問事件

という意味である。日本共産党の歴史上にはさまざまな分派が発生し、それには簡略な名が付けられるのが普通だった。戦後だけでも古くは「所感派」「国際派」「構造改革派」「(毛沢東)盲従派」等のほか、その一派の指導的人物の名を冠して「志賀一派」「春日(庄)一派」とかの俗称で呼ばれ、それぞれにはそれなりの謂われ因縁があった。ところが今回の場合に付けられた名称は、「形勢をうかがって、自分の都合のよい方につこうと二股をかける」(「広辞苑」の「日和見主義」の項)者たちといったもので、なんとも主張性のない、リーダーもはっきりしない、どう名付けていいかも分からないような「新しく発生した情けない連中」程度の意味しか伝わってこない名称なのである。ここでも名称だけでは何のことかさっぱり分からない。ここにこの事件の一つの特徴があったのだが、それは本文にゆずる。

「事件」は民青(日本民主青年同盟)と全学連(全日本学生自治会総連合)を主な舞台にして発生した。それぞれの組織の本部幹部の全員を共産党員が占めていたという意味で、共産党系の青年学生運動の根幹部分で起こった査問事件であった。

民青は「日本共産党のみちびきを受ける」ことを規約に明記した組織で、当時は同盟員数公称二〇万人といわれた。同盟員全体の四分の一ほどが党員で、他は民青の活動をとおして党員になっていくことが予定されていた。党にとっては大事なプール組織だった。本部は鉄筋五階建ビルを持ち、常時一三〇名ほどの者が機関紙誌の発行やら地方組

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

織（それは党組織にならって都道府県委員会、地区委員会、班組織に至るピラミッド型に編成されていた）への指導やらに携わっていた。一三〇名のうち一五名が中央常任委員とされた。いわば最高の執行機関である。私はその一員であった。その次に中央委員会（一〇三名）があり、これにはほとんどの県の県委員長が含まれていた。査問には中央常任委員のうち七名、中央委員のうち三〇名が連座し、結果的には全員が民青組織から追放された。

敗戦後結成された歴史上の全学連は、一九六〇年安保闘争の過程で分裂崩壊したが、その中の多数派は、主に共産党と民青の力によって再建（一九六四年）された。当時の新左翼諸派もそれぞれ全学連を名乗っていた関係で「代々木系」「民青系」の呼称で呼ばれた。私は再建された全学連の委員長で、そこを「卒業」（六六年）後、民青本部に入ったのである。本書には当時の学生運動で幹部だった者たちが多数登場する。

本書の構成は、ほぼ時系列にしたがっている。ある日突然始まった査問の経過、査問終了後の「隔離・再教育期間」ともいうべき五ヶ月間の特異な体験、私の離党体験を含む追放後のそれぞれの人生の道のりを記した。最後に、現在の地点から振り返って、私が「事件」について考えたことを紙数の許すかぎり触れた。

二五年も前の事件の話を、私はなぜ、今ごろになって書こうとするのだろうか。私には、歴史を変えようとか、誰かを告発しようとかいう気は全くない。査問は、最低限、

被査問者の「合意」がなければ成り立たないものであり、私を含めて被査問者たちは全員がこれに合意した。また、当時の自分の振るまいがどんなに不本意なものであったにせよ、二五年の長期間にわたってそのことについて沈黙してきた。私が本書を執筆したのは、なぜそのようなことが起こったのか、事実を記すことになぜかくも長き時間がかかったのか、それを明らかにしたいがためである。糾弾ならもっと早い時期にやっていた。だが、それは何も生み出さなかっただろう。「事件」は私の中でようやく歴史になったのである。もちろん、自分の怠慢と愚かさを棚に上げてのことである。

一九九七年一〇月

川上　徹

第一章●査問の風景

無言の男たち

その日（一九七二年五月九日）の朝、私はいつもの出勤時刻九時に少し遅れて民青本部に入った。すると総務部の男が駆け寄ってきて、「即刻、代々木の党本部に行ってほしい」と言った。緊急の中央常任委員会のグループ会議（党員会議）が招集されたのだという。

おかしいな、と咄嗟に思った。常任委員は全員がいるのか。何人かは「慰安旅行」に参加しているはずなのだ。民青本部では、年に一度、各人の積立金と本部会計からの多少の援助金をもとに、本部員全員が参加する一泊二日程度の旅行を計画する。今年は、二班に別れて栃木県・日光に行くことになっていた。民青本部には三役を含めた常任委員一五名のほかに本部員一三〇名ほどがいた。それがちょうど半々に分かれていたのである。私はいずれの組にも参加していなかった。あまり気が進まなかったからである。

第一陣が昨日の早朝、チャーターした大型バスでここを出発しているはずだ。少なくとも同僚の宗邦洋（そうくにひろ）は行っている。彼は旅行を楽しみにしていた。早くとも今日の夕方にならなければ、彼らは帰って来ないはずであり、第二陣は明朝早くここを出ていく予定になっている。今日は、本来なら本部は片肺ではないか。みんな「慰安中」なのだからという気安さもあって、私は多少の遅刻をしたのだった。

第一陣は何らかの事情で今朝早く帰ってきたのだろうか。いや、常任委員メンバーだけが一足先にとんぼ返りしたのだろうか。そうかもしれない。

総務部の男は「早く行ってくれ」と言う。何か重大な事態が発生したに違いなかった。

「他の人たちは？」

男はそれには答えず、「ここには誰もいない」とだけ言った。

時計を見ると、私は出勤時間に二〇分ほど遅刻している。それにしても、寸刻を争う緊急事態とはいったい何だろう。胸騒ぎを抑えて大通りに出た。

ＮＨＫの通用口に面した、車の通行量が比較的多い通りである。空車を待ちながら、私は、昨日夕方、自分にかかってきた一本の電話の内容を反芻していた。共産党東京都委員会に勤務しているその電話の相手は明らかに公衆電話からかけていた。

「本部とミヤコの間の動きが慌ただしい。昨日から緊急に乗用車が何台か用意されたようだ。民青という言葉が交わされている。動きが異常だ」

小さく低いその声はそれだけ言って切れた。「ミヤコ」。私たちは共産党東京都委員会のことをそう呼んでいた。党本部とは歩いて三、四分の位置にある。

党本部の玄関を入った途端だった。

顔見知りの受付の男は、即座に視線を私に貼り付けた。

「民青本部の川上ですが、会場はどこ……」

私に最後まで言わせず、その男はすぐ裏の控え室の方に声をかけた。

「来た……」

控え室の中から見知らぬ男が出てきて「こちらへ」と促した。

こんなことは初めてだった。党本部にはいくつか会議室があって、今日のように党本部以外の党員たちの会議が開かれる時などは、受付が「会議室使用表」をもとに割り振られた部屋を教えてくれるのが通常であった。

男は自分が案内しようというのである。迷路のような通路を、私はその男に従って行った。途中でエレベーターに乗った。止まったのは四階だったろうか。互いに無言だった。

そのフロアに着いてふと振り返ると、体格のがっしりした、顔見知りの富永がいた。もと国体の格闘競技選手だったという。懐かしい顔だった。彼と最後に会ったのは三年ほど前のことだった。

東大闘争の最中のことである。東大全共闘が安田講堂を占拠し、建物の封鎖・占拠を全学に拡大しようとしていた時だった。これに対して、封鎖を実力でも阻止しようと全学連は全国動員をかけた。世間では「民青系全学連」と呼ばれていた組織である。互いに一万人の全国動員をかけ、一歩も譲らず、武力対決にまでエスカレートした。もちろん、党も民青も組織をあげてこれに取り組んだ。私は当時、党本部の青年学生対策部員を兼ねており、全学連中央の党員たちを指導する関係にあった。いわば臨時に設置された、党の「現地本部」の責任者であった。シュラーフにくるまって暖をとっているところへ、突然、富永は現れた。富永は民青のスポーツ活動についての密接な協力者であり、とりわけ私とは親しい関係にあった。彼は「党から派遣されて来た」と言った。その晩、全共闘とは一触即発の緊張関係にあり、何が起こっても不思議ではなかった。「現地本部」を「党として」守ることが彼の任務だったのである。

私は思わず声をかけようとした。しかし、このときの彼は、私と視線を合わせようとしなかった。

「いったい、どこで会議が行われているんだろう」

息が詰まりそうな緊張から早く解放されたいと思った。異常な事態が起こりつつあることは分かったが、これも、わが同僚たちと顔を合わせればすぐ分かることだ。会議の場所に早く着きたかった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com